Here Now Bestopia
ベストピア Bestopia
第438号
2023年08月号
パリ通信
第140号

「赤紙と徴兵」そして兵事係

まえがき

2012年12月享年67歳で逝去された方の評伝を書き始めたところ、その方（以後Aさん）のお父さんの職業が兵事係であることが分かった。その事実をそのまま字句通り書いて済ませることも出来たが私はここで自分の無知を見過ごすことができなくなった。
兵事係とは簡単に言うならば「赤紙を届ける人」であって、法律によってその人自身は徴兵されないことになっている。しかし、Aさんのお父さんは1944年8月頃戦地に赴いている。Aさんが生まれた1945年3月17日その日に「レイテ島で戦死」という公報が届いた。

私は兵事係という言葉にとらわれてしまって「赤紙と徴兵」（吉田敏浩著）を読んだ。Aさんのお父さんを頭におきながら兵事係はどんな役割を果たしたのだろうかを知りたかった。

兵事係とは

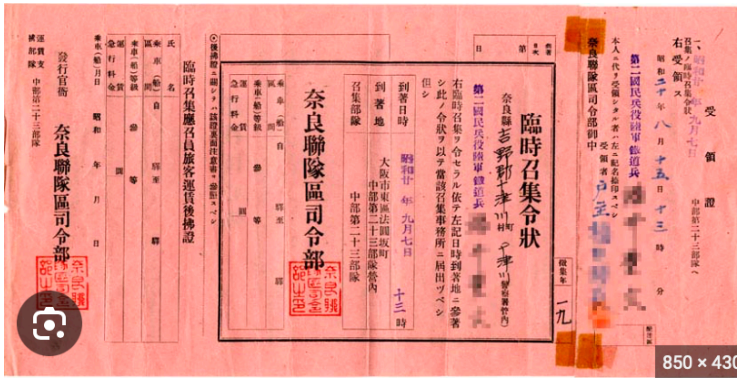
耳慣れない言葉だが、かつて戦前・戦中に全国の市町村役場で、徴兵検査や召集令状の交付、出征兵士の見送り、武運長久祈願祭の開催、戦地への慰問袋の取りまとめ、戦死の告知、戦死者の公葬、出征軍人家族や遺族の援護など、兵事に関する膨大な業務を担っていた。

膨大な業務を丁寧に見ていくと、⑴徴兵に関することでは、戸籍簿と徴兵適齢届に基づいて家庭環境、経歴、病歴、性格、品行、風評などを調べて「現役兵身上明細書」の作成、「在郷軍人名簿（在隊時の勤務状況、品行、賞罰等在隊間成績調査）、⑵動員に関することでは、赤紙（召集令状）の交付記録、動員日誌、召集令状の交付手順を克明に記した動員実施業務等々、家の不動産や戸主の収入、課税額、「特に注意すべき件」には「他人の無品を掠めるかもしれない性癖」等の個人情報が満載されている。在郷軍人名簿の作成、

これらの書類を市町村は毎年1月10日までに道府県の官吏である兵事官に提出、兵事官は１月20日迄に陸軍の連隊区司令部に提出義務があり。（陸軍の連隊区司令部は日本全国各地に５９連隊あった）。連隊区司令部は1月31日迄に所属する師管の師団長に提出しなけらばならなかった（師管は全国に14あり、師管のもとに３～６の連隊区があった）

各師団の長は「師管壮丁人員表」を作成し2月10日迄に陸軍大臣に提出、大臣は天皇の裁可を経て師管ごとに毎年の徴集人員を連隊区司令部に割り当て、更に末端の市町村に割り当てられていった。

赤紙は誰が作ったのか



長々と書いたがそれには理由がある。「赤紙は誰が作るのか？兵事係が作るのではないか」という疑問がつきまとって兵事係を苦しめたのである。兵事係は末端の事務を忠実に果たすことで選考の過程は秘密裡であった。しかし、所在不明者が出た場合等、警察と協力して徹底的に隅々調べ尽くさねばならなかったので、何も知らされていない市民には恐れられた存在であった。「赤紙が来る」と覚悟と恐怖の中で人々は暮らしていたのである

誰が作るのかは知らない。絶対の秘密事項であった。ただ赤紙が主語になった短い言葉が日常語になっていた。まるで赤紙に意思があったかのように。「赤紙というのは来るときは来る」と国民は思っていた。

当時の日本の軍隊への入り方には４通りあり

⑴現役兵（徴集による初年兵20歳と陸軍では2年兵、海軍では3年兵）

⑵召集兵（召集令状・赤紙によって入隊を命ぜられた者）

⑶志願兵、多くは20歳未満の者、最後には割当制になった。

⑷武官（職業軍人と下士官ーー現役兵や志願兵で現役期間満了時に更に志願した者の中から選抜される）

⑵の召集兵の対象者は①現役を終えた予備役（陸軍5年4か月、海軍4年）②それを終えた後備兵役（陸軍10年、海軍5年）③それを終えた第一国民兵役（40歳迄）と④第一・第二補充兵役及び⑤現役としては徴集対象外の第二国民兵役（17歳から20歳と徴兵検査で丙種に分類された身体能力の低い者）

この①②③④⑤を総称して在郷軍人と呼ぶ。兵事係によって在郷軍人名簿が作られた。（兵役義務は17歳から40歳、昭和18年から45歳に延長された）

この在郷軍人名簿を基本として天皇裁可の「年度動員計画令」が出され担当司令部で赤紙は作成された。赤紙作成の段階で兵事係は関与していない。

赤紙の交付の手順は次の通り。

陸軍大臣～師団長に電報～連隊区司令部へ電報～警察署と市役所に電話で「動員令予報」が伝えられ、その後警察官が役場に召集令状（赤紙）を届けた。これを該当個人に配るのが兵事係の仕事であった。（昭和16年7月から電報、電話の使用は防諜の観点から禁止された。）

兵事係の方の回想

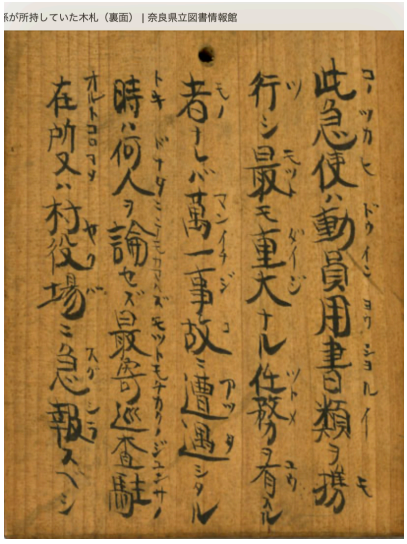
「赤紙は昼夜の別なく来ましたが、来るのはなぜか夜間が多かったです。軍事機密に関わるからでしょうか。警察署から「動員令予報」の電話があり、役場の宿直の使丁(小使い)が自宅に知らせにくると、すぐに役場に行きました。村長と兵事係と書記と収入役が役場に集まって、警察官が赤紙を届けにくるのを待ち、それが届くと「在郷軍人名簿」と照らし合わせて氏名など間違いがないか確認するんです。人の命がかかっているので、間違いがあってはいけません。何回も見直して、とても神経を使いました。兵事係の責任は重大なんです」

「そして、自転車に乗って赤紙を届けました。大阪や京都に出稼ぎや丁稚奉公に行っている人も多かったので、本人がいないときは家族が受け取りました。本人には家族が電報などで知らせるようにしていたんです。赤紙を朝、配るときもあり、本人が家にいなくて田や畑に出ていれば、そこまで行って渡したものです」

「また、私だけでは配りきれないので、信頼できる青年団員にも赤紙を配る使者の役目を頼みました。「動員令予報』があると、前もって決めてある村内令状配達区域の青年団の若者を役場に呼び集めたんです。そして自転車で配達させました。p61

呼び集めたんです。 そして自転車で配達させました」

「ただ、家によっては何人も召集された家もあります。だから、すでに出征者のある家や戦死者が出ている家には、必ず私が届けるようにしました。やはり気の毒でしたから……出征した五人の息子さんのうち三人が戦死した寺田利兵衛さんの家に赤紙を届けたとき、本人が不在で代わりに利兵衛さんが受け取り、「そうですか、また来ましたか」とじっとうつむいて、ぽろっと涙を落とされたこともありました。あのときは、こっちまで泣けてきました……。どの家も働きざかりの息子や夫を軍隊に取られて、戦争で命までも取られるかもしれないのですから。赤紙というのはただ簡単に渡せるものじゃないんです。赤紙を配るのはつらいことでしたが、国のため、役目だと思ってやりました」p62



赤紙の配達は命懸けの重大な勤めであった。13条からなる「赤紙を配達する者の心得」の④途中乗り物が破損して急に修繕のできないような場合には、直ぐ下りて少なくとも１時間４キロ以上の速さで行かねばならない。（自転車は全速力で走らせ、途中で誰かに話しかけられても、決して応じてはならない。自転車は止めてもいけない。）

⑨令状等はなるべく5分以内に渡すように心がけねばならない。この⑨は到着して相手と話す時間を決めている。感情移入が起こる人間の心を察してそれを押し殺して渡せという命令である。

赤紙を受け取った人

来るべきものが来た。
水田の畦の草取りをしているとき、兵事係さんから、「河瀬君、持ってきたぞ」（おめでとう）と告げられ、赤紙を渡された。そのとき22歳だった。
河瀬さんは日記をつける習慣があり、その日の日記には、「水曜、晴天。午前六時起床。九時頃、予期どおり召集令状来る。男子の本懐これに過ぎず。海行かば……の歌有るのみ」と記している。
河瀬さんはそのときの心境を次のように語った。
「男子の本懐これに過ぎずとは、男として生まれた以上、これより嬉しいことはないはずだ、という意味です。しかし、本当は嫌なんです、心の中では……。 けれど、 『海行かば・・・・・の歌有るのみ」と書いたのは、「海行かば水漬く屍、山行かば草むす屍
大君の辺にこそ死なめ 顧みはせじ」という歌ですね。あの歌の気持ち……。 それまで親や先生の世話になって成長してきたが、これからは天皇陛下のために死ぬことになる、悔いは残らない、という気持ちからで、それもまた本当の気持ちなんです。やはり来るべきものが来た、と思いました」p88

戦時中の教育は「君は何のために生きるか。君の命より大切なものがある。それに命をかけよ」と教え込まれていた。それとは「天皇のため」である。ほとんどの人はその洗脳教育を素直に受けるように訓練されていた。

兵事係を更に苦しめたのは、赤紙を渡した後の「町内巡視」である。その巡視行動は兵事係の仕事ではなかったが、規則では「条令発送後、巡視係を命じ巡視せしむ」となって役場の書記や書記補佐を巡視係として赤紙受領者（応召員）の身辺を監視するすることであった。

「村内巡視心得書」

軍は、赤紙を受け取った応召員とその家族が、召集をどのように受けとめているのかを知ることを重視していた。応召員とその家族が動揺し、召集を嫌がるような言動をしたり、召集に応じないで行方をくらましたりしたら、軍の戦力を損ない、銃後の国民の士気にも悪影響を及ぼすことになる。だから、応召員とその家族の反応を把握しようとした。
応召員の士気とその家族の様子、その周りの住民の様子などを含めて巡視係は兵事係に報告しなけれなならなかった。兵事係はそれを刻目に記録して報告することが義務付けられていた。
巡視係の報告書の一部には次のようなものがある。
「応召員志気最モ旺盛ニシテ、令状受領セバ直チニ体ヲ潔メ、自家の神仏に生還を期セジトノ出征ノ旨ヲ告ゲ、家族又応召者ニ対シ志気ヲ激励シ、村民一般国家的観念盛ニシテ応召員ノ出発二際シテハ全村民挙ゲテ駅頭ニ歓送セリ。」p132

決まった形式といえなんと心寒い文章であろうか。、「自家の神仏に生還を期セジ」と「一般国家的観念（天皇陛下万歳）とが一体となっている。

国民の本心は違っていた。国民は「国賊」「非国民」と呼ばれることを命をかけて避けたのであると私は思う。哀しみ、やるせなさは密かに表されていたことは戦後の記録からも理解できる。兵事係の人もそれは感じていた。

「当時、村の人たちはみんな、口にこそ出しませんが、自分の家に私（兵事係）が来なければいいと思っていたはずです。私が自転車に乗って走っていると、いったいどこに行くのか、どこかの家に赤紙を届けているのではないかと、いつもみんなが私を見つめて、注目していました‥‥‥。 兵事係が召集の人選をすると思い込んでいる人もいました」「だから私を恨んだ人もいたでしょう。面と向かって言われたことはありませんが。そう感じていました。」
「すでに何度も赤紙が届いて、息子さんたちが召集されていたある父親が、自分で捕った大きな鯉を私の家に持ってきて、「なんとか、もう自分の息子たちを召集しないでほしい」と、私に頼み込んだこともありました。自分が召集の人選をしているわけではないと、繰り返し説明しましたが、とても気の毒で、本当に弱りました……」p134
兵事係の苦悩は察してあまりある。人間が作った組織が人間を苦しめる。誰も幸せにならない組織、それが軍隊である。

兵事係は戦時召集されることはない。

「警察官、市・町村または之に準ずべき者の官公吏にして兵事事務を担当する者」として「戦時召集猶予者」に該当したからである。猶予者ではあるが事実上、召集を受けとることはなかった。

戦況の悪化と共に厳しくなる兵事係の業務

兵事係の仕事は、徴兵検査の手続きや召集令状の交付など、男たちを軍隊へ、戦場へと送り出すことにとどまらず、もっと幅広かった。国防献金や戦地に送る慰問袋の取りまとめと発送、武運長久祈願祭の執行、出征軍人家族や戦没者遺族や傷痍軍人とその家族への援護　　戦死の告知、戦死者の公葬や慰霊祭の執行など、戦場の後方にあって戦争を支える地域社会、すなわち銃後の護りにも深く関わっていた。

出征した兵士が戦死した場合、市町村長に戦死の電報が届く。
これを「内報」といい兵事係から遺族に伝えられた。（部隊長からの「戦死公報」は数ヶ月後に届けられた。）また戦死者の葬儀は役場（兵事係）が主宰した。
兵事係は戦地からの出征兵士と銃後を結ぶ要ともいえる役割を果たしていた。(p172-173)

昭和16年7月になると、防諜（スパイ活動などにより秘密が漏れることを防ぐ）対策も兵事係の重大な任務となってきた。このスパイ活動には身近な人の国家批判発言や姿勢の巡視が主な内容であった。
「スパイは汽車に井戸端に」
「防諜上ニ関シ其ノ筋ヨリ」、昭和16年10月15日付け、連隊区司令官から各市町村長宛て、「応召ニ関スル注意事項」にある禁止事項はさらに細かく厳しくなっている。

①、出発ノ際、家族近親、朋友等ノ付添ハ絶対二禁。
（応召者ノ付添人及面会ハ許可セラレザルニ付キ此ノ段当該家庭ニ伝エラレタシ。）

②、角飾り、旗、国旗掲揚ハ禁ズ。
③、決別、 見送り人ニ対スル挨拶ハ応者ノ自宅屋内ニテナスコト。
（出発ノ際多数乗車駅へ見送リスル者アリ、各戸ニ対シ相当注意相成度。）

④、出発二際シ、神社、寺院ノ参拝ハ単独参拝ナルコト。
⑤、応召日時、応召部隊、応召人数、行先ハ如何ナル場所、何人ト雖モ口外セザルコト。
⑥、頭髪、爪等ハ出発前二自宅二残シ置クコト。
（応召者ハ応召ノ為ノ散髪ヲ為スコトナク、ソノママ入隊スル如ク指導セラレタシ。
一般家族中ニテ理髪店又ハ女理容所ニテ防諜上注意ヲ要スベキ言動ヲ発スル者アリ、相当注意セラレタシ。）
⑦、奉公袋ハ風呂敷包ミ持チ行クコト、軍服着用ハ禁ズ。
⑧、本書一読ノ上ハ焼却セラレタシ。

戦死者の数が増え、志願兵を募る段階になってきた。
⑥の頭髪、爪の自宅保存の意味するところは不気味である。「生きて帰れるとは思うな」という命令に等しい。よく考え、練られた言葉である。また、理髪店での会話まで覗かれ聞かれしている。相当注意せよとは志願兵への応募を進め、相互監視体制の強化がこの注意事項から読み取れる。

戦没者の公葬と死の現実

銃後の国民と戦戦地の招聘を結ぶ儀式として武運長久祈願祭と並び重要だったのが
死者戦、戦病死者の公葬と慰霊祭である

ご遺族は白木の箱に入って帰ってきました。ご遺族が連隊に受け取りに行く、兵事係の私は在郷軍人会の分会長と、駅まで迎えに行き、汽車からご遺族が白木の箱を抱えて降りてくると、一緒に村を歩いて帰りました。在郷軍人会の分会長が分会旗を捧げ持って歩きました。白木の箱に遺骨は入ってなくて、名前を書いた紙が一枚入っているだけだと、ご遺族から聞きました」

一方ではスパイ活動の相互監視、他方では地域ぐるみの祭祀・公葬で悲しみを共にして連帯感を強化し、加えて情報を統制することによって軍部に操られていく国民、その行き着くところで何が待っていたのか。

そして慰霊祭が行われ靖国神社合祀となって英霊と崇めらる。国民はこうして村ぐるみ、地域ぐるみで戦争を支えてきた。命は本懐を遂げたと思わされたか、思ったか。
人間には（自分の）命より大切なものがある。それに命をかけるのが男の生き甲斐だという人が今も多数存在する。

靖国神社は人間が造った組織的墓場である。天皇のために命を捧げた人たちが集められている。日本では天皇は過ちを犯さないと信じられてきた、今もそうであるかも知れない。兵事係は赤紙配布から墓場まで見守るという残忍過酷な仕事であったと想像する。人間には良心がある。その良心が誤った方向に向けらることもある。戦争がその代表である。

戦況は1942年年6月のミッドウェー海戦で太平洋の制海権がアメリカ側に移ったことを転機とし、1943年2月、日本軍がガダルカナル島から撤収したことを決定的な分岐点として、連合国軍は反攻に転じた。日本の戦死者戦病死は増加の一途をたどり1943年（昭和18年）に兵力不足を補うため、高等教育機関に在籍する20歳（1944年10月以降は19歳）以上の文科系〈および農学部農業経済学科などの一部の理系学部の〉学生を在学途中で徴兵し出征させた（学徒動員）。1944年9月には、連合国軍はサイパン島やグアム島などマリアナ諸島を占領した。すでに昭和17年から始まっていた海軍志願兵の割り当てのノルマが強化され厳しい命令が司令部から市町村になされてきた。

兵事係の仕事は「いかに志願兵を増やすか」「割当員数を以下にして確保するか」で頭を悩まし、個別訪問を始めた。志願兵は身体検査と学力検査がなされたが、兵事係は彼らの学力試験に備えて学習指導（補習）をしなければならなかった。形式の組織化とでもいえる（今だから言える表現であるが）滑稽な演技が繰り広げられた。

どのような問題であったか私には研究することができないが、辞世の歌を書くことを教えられたのではないかと想像している。

「あの頃、軍隊に入る前に遺書みたいなものを残していく人もいれば、 辞世の句や歌を書いて、そっと自分の部屋の本などにはさんでおくとかしていましたね」
「大君の御稜威輝く海原に醜の御楯*と我も征かなむ」（天皇の威光が輝く海に、私のような醜いものですが、あなたを守る楯となって勇んでいきましょう）と、半紙に筆で書き、大切な物を入れる木箱にしまった。それは誰にも見せなかった。そのとき、17歳だった。「海行かば水漬く屍、山行かば草むす屍、大君の辺にこそ死なめ顧みはせじ」
「辞世の歌ですね。もう当時は、すべて天皇陛下ですから.....。結局、ええ格好してたんでしょうね。自らを鼓舞していたわけです。いろんな偉人、哲人の話を聞かされて、そういったものに対する憧れもありました。あの時分の一番の憧れは 「忠臣蔵」、大石良雄(内蔵助)だったり、幕末の勤皇の志士たちだったり吉田松陰の辞世の歌、
「身はたとひ武蔵の野辺に朽ちぬとも留め置かまし大和魂」という歌などですね。
（1943年（昭和18年）5月1日海軍志願兵の入団した人の記録）

兵事係の人にとって自分が志願を勧め（ざるを得なかった）た結果、海軍に入り戦死した若者（遺骨はない）の知らせをその遺族に伝えなければならなかった。その負い目は生涯の苦しみであっただろう。

赤紙を配るときに「兵事係の〇〇さんがやってきた」と嫌がられ、戦死の通知のときにま「また兵事係の〇〇さんが来はった！」彼の動きは死を告げる使者であった。

あとがき

まえがきに記したAさんのお父様は兵事係で働いていた。既に記したように兵事係には赤紙は来ないことになっていたのにAさんのお父様は出兵した。その経緯を知る人はもういない。ただ伝えられていることは二人の弟に赤紙が来たということ。その二人に代わって自分が戦地に赴いたということである。いや弟の為ばかりでなく、送り出した若者の跡を追ったのかも知れない。
赤紙の発行の仕組みからして想像することができないことであるが、私はAさんのお父様は志願したのではないかと想像したい。戦死した場所と日時は1944年10月20日レイテ決戦であった。しかし、戦死の通知は1945年3月17日であった。白木の箱には紙一枚であった。Aさんは我が子の誕生を知らなかった。妻の思いは。覚悟はしていてもそれが現実になるとき人は何層にも重なる感情を持つ。怒り、悲しみ、寂しさ、やるせなさ等それらすべてを押さえ込んだ感情とは誰が想像できるだろうか。

2023年「平和への誓い」

　広島は6日、被爆から78年の原爆の日を迎えた。広島市の平和記念公園で開かれた平和記念式典で、広島市立牛田小6年の勝岡英玲奈（えれな）さん（12）と同市立五日市東小学校6年の米広朋留（ともる）さん（11）が「平和への誓い」を読み上げた。

みなさんにとって「平和」とは何ですか。
争いや戦争がないこと。
差別をせず、違いを認め合うこと。
悪口を言ったり、けんかをしたりせず、みんなが笑顔になれること。
身近なところにも、たくさんの平和があります。

昭和２０年（１９４５年）８月６日　午前８時１５分。
耳をさくような爆音、肌が焼けるほどの熱。
皮膚が垂れ下がり、血だらけとなって川面に浮かぶ死体。
子どもの名前を呼び、「目を開けて。目を開けて。」と、叫び続ける母親。たった一発の爆弾により、一瞬にして広島のまちは破壊され、悲しみで埋め尽くされました。

「なぜ、自分は生き残ったのか。」
仲間を失った私の曽祖父は、そう言って自分を責めました。
原子爆弾は、生き延びた人々にも心に深い傷を負わせ、
生きていくことへの苦しみを与え続けたのです。

あれから７８年が経ちました。
今の広島は緑豊かで笑顔あふれるまちとなりました。
「生き残ってくれてありがとう。」
命をつないでくれたからこそ、今、私たちは生きています。私たちにもできることがあります。
自分の思いを伝える前に、相手の気持ちを考えること。
友だちのよいところを見つけること。
みんなの笑顔のために自分の力を使うこと。

今、平和への思いを一つにするときです。
被爆者の思いを自分事として受け止め、自分の言葉で伝えていきます。
身近にある平和をつないでいくために、一人一人が行動していきます。
誰もが平和だと思える未来を、広島に生きる私たちがつくっていきます。

パリ通信・第140号　2023年8月号

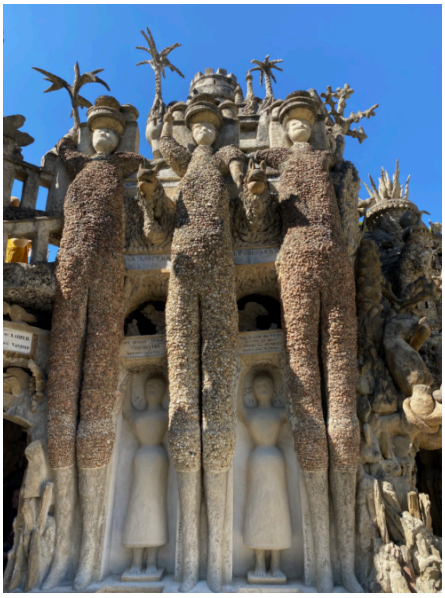
郵便配達人フェルディナン・シュヴァルの理想宮

リヨンから南に80km、グルノーブルから西に70km、ヴァランスから北に45kmの位置に人口2000人足らずの小さな村「オットリヴ」(Hauterives)がある。緑豊かで起伏が美しく、ローヌ河支流ドローム川(la Drôme)の清い水が流れる田舎だ。この地に「郵便配達人フェルディナン・シュヴァルの理想宮」が建っている。

フェルディナン・シュヴァル(1836-1924)は「オットリヴ」に近い「シャルム・シュル・レルバス」(Charmes-sur-l'Herbasse)の貧しい農家に生まれる。小学校に行かない子供も珍しくなかった当時、両親が捻出したお金で6歳から12歳の初等教育を受ける。
1847年母親、1854年父親を亡くし、二度に渡るエルバス川の氾濫で農業を諦め、1870年普仏戦争兵役の代わりにドローム県庁所在地ヴァランスのパン屋で勤労奉仕する。1858年結婚するが生活苦に変わりはなく、読み書きができたことも幸いして、1867年郵便配達人の職を獲得する。10年間は転勤が続いたが、1878年から「オットリヴ」郵便配達員となり、周囲30-40kmの配達区を歩いて廻ることになる。60歳で定年退職するまで昼間は郵便配達、夜と休日に石とモルタルで工事を続ける日々が続く。

1879年偶然「躓いた石」から発想を受け、郵便配達の道すがら見つけた面白い形の川石を拾っては持ち帰った。1912年完成するまで33年の年月を費やした。南北の長さ26m、東西の幅14m、高さ8〜10mの類まれな「理想宮殿」で、バロック・オペラの背景、映画の舞台になりそうな幻想的で東西文化が混在する奇妙な建物である。1969年当時の文化大臣アンドレ・マルローによりナイーヴ・アートとして文化財の指定を受ける。
建設工事は東のファサードから始まる。「命の泉」を中心に右手には「聖アメデの洞窟」「知恵の泉」「エジプトの宮殿」、左手には「3人の巨人」(シーザー、ガリア戦争中紀元前52年アレジアの闘いでシーザー率いるローヌ軍に敗れるガリア軍長ウエルキンゲトリクス、アルキメデス)が立っている。
西のファサードには「イスラム教のモスク」「中世の城」「アルジェの四角い家」「スイスのシャレ」「ヒンズー教の寺」など東西建築が渾然一体に配置されている。

郵便配達員だったフェルディナン・シュヴァルは海外旅行をしたこともなく、建築の専門知識があった訳でもない。「理想宮」のモデルとなったのは、日々配達する絵葉書であり、当時の会員登録制雑誌の挿し絵や版画だった。特に「Le Magasin Pittoresque」(絵のように美しい店)(1833-1938)、「 Les Veillées des Chaumières」(藁葺きコテージの夕暮れ時)(1877～)の2冊から世界の建築を知ることができた。建築の専門知識はなく、一つ一つの石をモルタルで固めて築いた。時間と共に風雨に晒され、傷みや滑落、安全性も問われる。シュヴァル没後は村が買上げ、基礎コンクリートを流して土台を固めた。動植物の装飾は鉄筋コンクリートで修復された。現在北と西のファサードの修復が終わり、修復は今後も続けられる。たった一人で一つ一つの石を積み上げた「理想宮」は建築の原点とも言えるだろう。



夏休みには一日平均1500人、年間25万人の見学があるそうだ。毎時間解説と案内を担当してくださる職員の方によれば、フェルディナン・シュヴァルは当時の田舎には珍しく「著作権」の意識を持っていた人だった。1905年には建設中の「理想宮」見学を企画し、自ら案内した。当時は絵葉書の時代で絵葉書に使う写真には著作権料を求め、宮殿前で本人がポーズをとった写真も多い。人の想像力と何かをやり遂げるという強い意志が「理想宮」という形で一世紀過ぎた今日もなお残っている。たった一人でできることに感心すると同時に、何を後世に残せるかを考えさせられる見学だった。（古賀順子記・写真撮影）